

Ⅳ 地理の領域構造の検討

＝ 実践的資料として ＝

加 藤 佳 孝

1. はじめに

地理学は地域を土台にして、系統的あるいは地誌的アプローチから地域性を究明し、地域空間の配列構造の追跡を目標としている。中等教育における地理は、社会科という枠の中で、中学校では日本地誌・世界地誌、高校では系統地理として実践されてきた。しかもその実践は、学習指導要領という1つの典型にもとづき、各現場で様々な制約を受けながらも、教師の創意や工夫により、そのねらいを達すべく努力が続けられてきた。また、地理学が変貌する地表、即ち、今日の社会・経済的発展の著しい日本や世界の諸地域を題材としているかぎり、年々新しい学習さるべき教材の増加は必然である。しかし、現状では様々な制約のもとに、あいもかわらず旧態依然とした地域区分による日本・世界地誌が、生徒に少しも身近なものと感じさせない系統地理が教えられている。このような反省と、地理がいかに学習されるべきかという観点から中等教育における地理が地域空間の配列構造へのアプローチの方法として地誌的側面・系統地理的側面を合わせた新しい学習体系やその体系の中での領域構造の検討が要請されてきた。このような情勢下に1つの新しい典型として新指導要領が発表された。しかし、この新しい典型も現状から脱皮した新しい地理の学習体系を、という現場の要請には十分答えたとは言いがたい。それでも昭和47・48年度からは新しい典型にもとづいて実践されねばならないのであるが、地理担当者としては網羅的内容の伝達地理・説明地理に陥らぬよう意識し、思切った学習内容の精選と重点の学習内容の設定を試みねばならないし、授業方法においても、問題解決学習や範例学習等として、またそれを能率的・効果的なものにするためには、新しい教育機器を利用して実践されねばならないと考える。

本校においては以上のような問題意識のもとに、新しい地理の学習体系とその領域構造の検討への足がかりをつくるために種々の実験を試みているが、以下には中学校社会科における郷土学習の実践例、高校地理

Bにおけるグループ学習の実践例をあげて、今後の検討の糸口としたい。

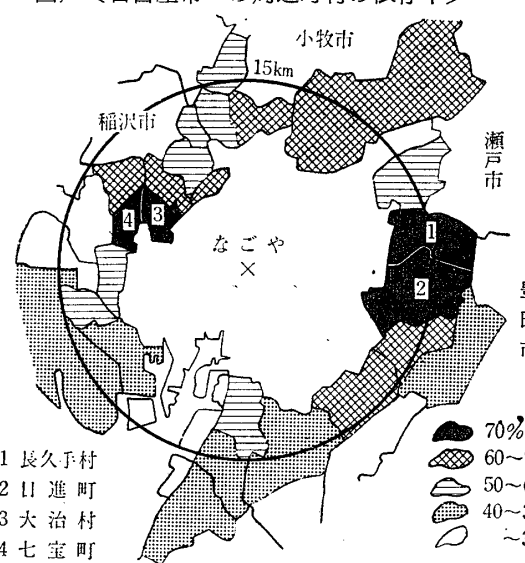
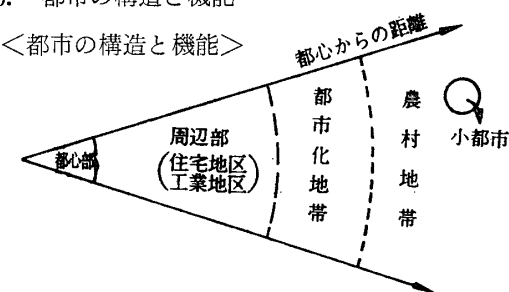
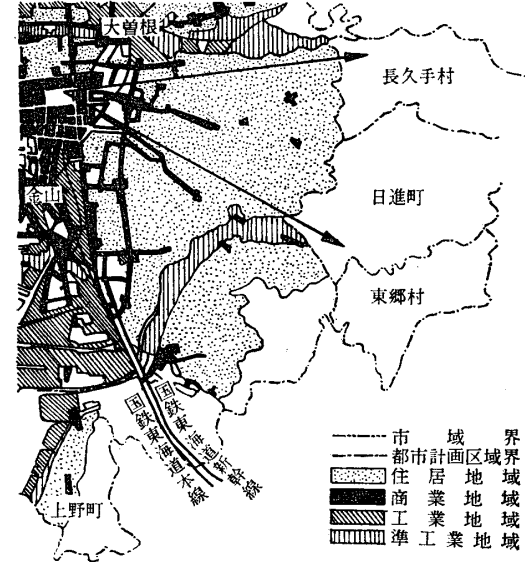
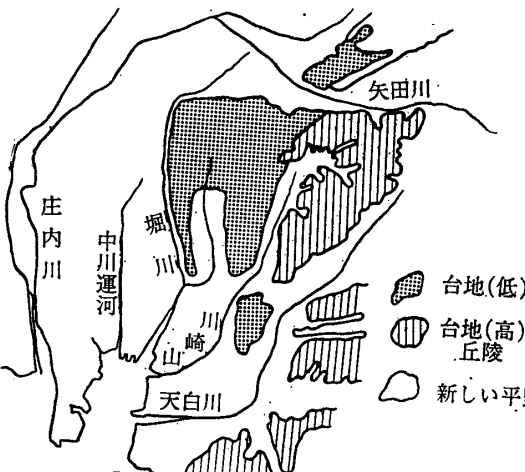
1. 中1社会科「郷土の学習」における 野外学習の展開事例（その2）

(1) 位置づけとねらい

中学校社会科の地理分野において、4つ大項目のうち1つ「身近な地域」は、そのねらい即ち地理的な見方や考え方の基礎力の養成とか、地理学習に対する興味づけという点からはきわめて重要な1大項目ではある。しかし、この項目は「野外の観察と調査」という内容を含むため、ねらいどうりの効果的な展開が困難である。本校では、この野外学習を伴う郷土の学習を、地理学習の導入して実践し、それがいかにあるべきかを検討するつもりである。以下は昨年度に続いて本年度実施した野外学習の展開例である。今後、このような実践を続け、野外学習のあり方や実践に伴う諸問題をいかに打解していくかを検討する材料としたい。（野外学習の位置づけとねらいは、昨年度紀要第15集に掲載した）

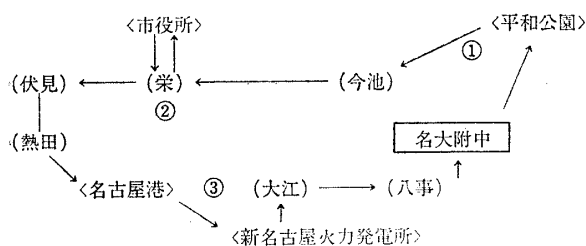
(2) 野外学習を含む「郷土の学習」の指導計画

郷土の学習の指導計画の立案に際して留意しなければならないのは、郷土の学習が「郷土」の地誌学習とするが、「郷土」の地理学習とするかという点である。本校においては、地理学習の導入として、生徒の身近な地域にある地理的に顕著な現象を取り上げ、野外学習を含む地理的学習と、日本の諸地域の中の郷土を含む地域の地誌的学習の両面の指導計画を立案した。次に述べるものは「郷土の学習」として野外学習を前提とした作業帳形式の小冊子からの抜粋である。これが指導計画のあらましであるし、それは、郷土を都市あるいは周辺農村地域も含んだ名古屋の都市圏として把握させ、教室において授業という形式で野外学習の準備したものの骨子である。（授業時数6時間）

	内 容	展 開
<p>郷土・郷土の範囲</p> <p>配当2時間</p>	<p>1. 郷土の意味</p> <p>2. 郷土の範囲 愛知全図, 名古屋市周辺の地形図, <名古屋市への周辺町村の依存率></p>  <p>1 長久手村 2 日進町 3 大治村 4 七宝町</p> <p>※名古屋市への依存率…なごや市へ通勤する率や高級品の買物にくる率などから計算する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 郷土は私達の生活の場 郷土の範囲→自分の家のまわり→千種区→名古屋市→尾張地方→愛知県→中部地方 ※考え方によっては広くも狭くも考えられる。 ※連続した地表を区分するという意味 ※郷土を名古屋市とその影響の及ぶ地域と仮定する ※郷土は行政区域とは必ずしも一致しない。 <ul style="list-style-type: none"> 各時代の地形図で, 自分の家のあたりを確認する。 地形図の学習 (地図の約束, 主な記号の意味) 自分の家のあたりや学校の所在地付近の土地利用を調べる。(明治・大正・昭和と比較してみる) 市街地の発展と名古屋付近の地形と関連づけて考えてみよう→市街地の地形は? 学校付近は? <p><名古屋付近の地形></p>
<p>都市の構造と機能</p> <p>配当4時間</p>	<p>1. 名古屋市の発展 明治の名古屋 (明治22年) 大正の名古屋 (大正9年) 現在の名古屋 (最新の地形図) のそれぞれの地形図を掲示と印刷配布</p> <p>2. 都市の発達 都市はどのように発達するか (同心円構造)</p> <p>3. 都市の構造と機能</p> <p><都市の構造と機能></p>  	 <ul style="list-style-type: none"> 都心からの距離に応じて土地利用が変わるか。 都市はどのような機能を持つ地域に分化するか 都心部の働き人を集める働きのあるものは何か <ul style="list-style-type: none"> 行政的機能…… 業務的 " …… 商業的 " …… 都市化とはどんなことか。 都市化地帯の変化のようす。 周辺農村地帯の役割と変化のようす ※名古屋市への依存率から考えてみよう。 <p>(まとめ)</p> <ol style="list-style-type: none"> 郷土の持つ意味と郷土の範囲 名古屋市の発展, 地形図の約束がわかるか 都市はおよそどのように発達するか 都市はどのような構をしているか 名古屋市はどのような機能地域に区分できるか 都市と周辺農村とは, お互いにどのような関連があるか。

(3) 野外学習(1日6時間分の授業として、バスを利用して実施)

① コースと学習のねらい。



(ねらい)

- ア 東部丘陵地域の住宅の観察
(住宅地にもそれぞれちがいはないか。何が何にかわっていくか)
- イ 都心部の機能とようすの観察
(行政・業務・商業などの働きをもつものはどんなものか)
- ウ 南部臨海工業地区の観察
(①, ②の地域にくらべて, どんな感じを受け
るところか どんな工場があるか)

② 学習の記録とまとめ

生徒はコースに沿って観察する事項や下車地での聞き取り調査の項目を記入できるような作業帳をもって学習をした。以下はその主な項目である。

1. 学校～平和公園

- ・名古屋大学付近は名古屋市中ではどんな働きを持つ地域か, 東山文教区
- ・平和公園から眺められるもの……東部丘陵地帯の変化…丘陵地の宅地造成, 名古屋IC, 地下鉄高架

2. 平和公園～今池～栄～市役所

- ・自由ヶ丘付近の団地式の住宅地の観察
- ・今池付近の観察……市電・市バス・地下鉄乗換地点, 商店のようす, 飲食店の多さ。
- ・栄付近(都心部)に近づくと町のようすはどう変わるか。

3. 市役所(企画課の説明, 屋上からの観察)

- ・市役所の機能は……市民生活と関連づけて
- ・名古屋市の将来についてどのような計画を持つか。

※都市の構造などと関連づけて聞いてみよう。

※都市計画の実施で問題になっていることは?

4. 市役所～栄～伏見。都心部の観察……どんなものが人を集めているか

- ・商業的機能の観察……名古屋市内の商店の分布図

5. 伏見～熱田～名古屋港

- ・国道19・20号線の役割……走る自動車の種類は
- ・名古屋港の役割……大都市と港

6. 名古屋港～新名古屋火力発電所

- ・南部臨海工業地帯の観察……臨海地域の工場分布
- ・5・6・7・8・9号地(埋立地)付近の工場地帯の観察

7. 新名古屋火力発電所～大江～八事～学校

- ・火力発電所の役割
- ・工場地帯の中の住宅地の観察……東部丘陵地帯の住宅地と比較してみよう。

③ 生徒の反応と効果

興味づけが以後の学習の最大の動機づけという観点に立てば, 一日の Field Work でも相当の興味と関心を自分達の生活圏である「名古屋市」に抱いたことは事後の感想文からも十分裏付けられる。日常ふれている事象・現象もそれなりに眺める視点をかえてやることによって新たな認識として生徒の中に集積される。このコースの野外学習で特に興味・関心・認識をもったのは, ①都心部の機能が大都市の中で位置づけられたこと。②南部臨海工業地帯の空気の汚染, 特に化学工場周辺の悪臭のひどきである。こうした現象の学習が教室の授業ではとかく観念的なものにしかならないのが, 膚で感じ取られたことは野外学習の1つの効果である。

(4) 今後の検討の方向

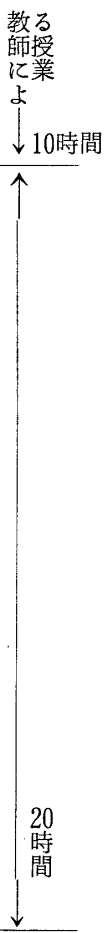
野外学習を伴う「郷土の学習」を昨年度に続いて実践を試みた。地理分野におけるその位置づけやその実践の在り方などについて分析するほどの詳細なデータを提出するまでには至っていない。昨年度は都市の構造と近郊農村の変貌という観点から名古屋市の東部地帯で実践を試み、今年度は都市の構造と機能地域の分化という点に視点を置いて実施した。今後も各種の Field で実践を試み, あり方を検討して行きたい。

3. 高校地理Bグループの実践例

地理Bを教科書に忠実に, 地理学史・自然環境…と学習を続けていくうちに, 1学期をすぎる頃になると地理は覚えることばかりでつまらない……という声が出はじめる。(この声は授業の記録というノートに授業の感想として記される)この理由の大半は教師の責任でもあるが, しかし, 授業方法の改善, 教材配列, 教材内容の精選などの必要性が存在することも確かなことで, この辺にも理由の半分はあるのかもしれない。本校では昨年来, 効果的な授業方法, 教材の精選など新しい学習体系の追跡という観点から生徒のグループ別共同研究と, その発表を通して授業を展開するという方法を実施してきた。以下は今年度の農牧業の学習計画とその展開例の一部である。

- (1) 農牧業学習計画(意識的に教科書に忠実にしてある)

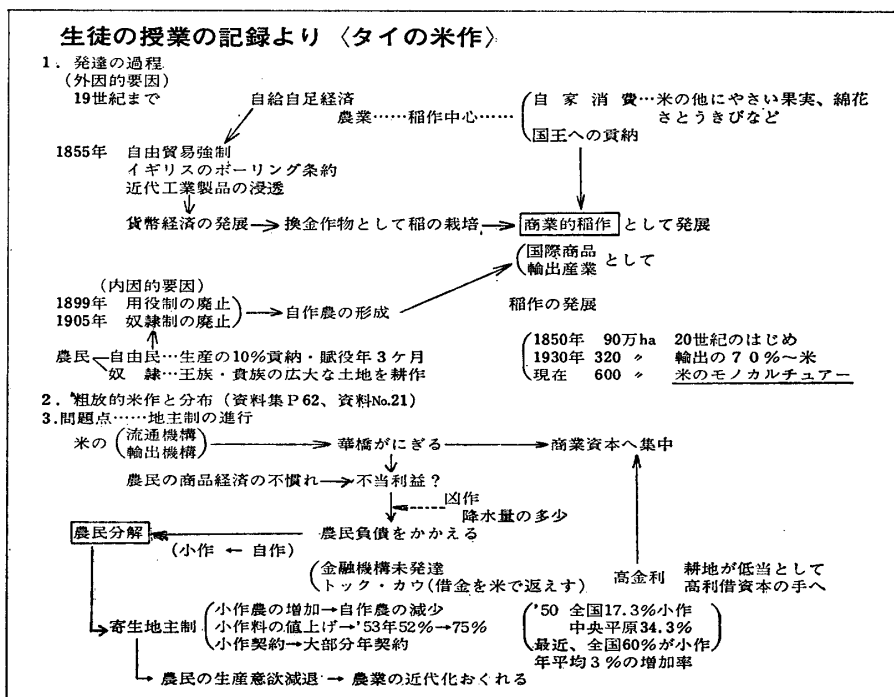
1. 農牧業の発達と地域分化
2. 世史の農牧業形態とその地域区分
 - a 原始的農牧業…焼畑・定着・オアシス農業・遊牧
 - b 伝統の古いアジア式農業
 - ・農業地域と自然
 - ・米作農業・畑作農業
 - c ヨーロッパで発達した有畜農業
 - ① 農牧事の地域分化 (授業)
 - ② 混合農業 発表 1
 - ③ 酪農業 " 2
 - ④ 地中海式農業 " 3
 - d 新大陸と熱帯の企業的農牧業
 - ① 農牧業地域の形成とその要因 (授業)
 - ② 企業的穀物農業 発表 4
 - ③ 企業的な大牧畜業 " 5
 - ④ プランテーション " 6
 - e 古い農牧業地域の新しい農牧業
 - ① 園芸農業 " 7
 - ② 集団制の農牧業…ソビエトを例に " 8
3. 日本の農牧業 " 9
4. 世界と日本の食料問題 (授業)



(2) グループ別共同研究と発表について提案と留意事項 (学習計画と以下の内容を印刷したプリントを配布)

- a グループ別共同研究と発表形式の提案

「諸君のこれまでの学習は受身の学習であって、学習になんらの主体性を持たなかったのではないかと、教科担任はこのような感想と反省の感を抱いた。諸君の中にもそのような感想をもった人もいるでしょう。学習は諸君等自身のものであって、教官のものではない。従って、ヨーロッパ式農業の学習からは、諸君等自身が主体性を持ちながら学習を進めていくために、グループ別共同研究・発表という学習形態を提案する」
 - b グループ別共同研究は次のようにして行なう。
 - ① グループ編成は各クラス9班とする。(各班5名)
 - ⑤ 何をどう研究し、何を理解し、他のクラス員には何を理解してもらおうか→グループ全員で討論し研究すること。
 - ③ 研究発表は一般的なことでなく、出来るかぎり具体的な例をとりあげること。
 - ④ 研究発表の内容はプリント三枚以内にまとめて、発表日以前にクラス員に配布すること。さらに発表時には、図表などはB紙に拡大掲示するか、OHPを使用して提示すること。
 - ⑤ 研究内容や資料作成に関しては事前に教官と打合せること。
- その他



(3) 教官授業展開例「アジア式米作農業—タイを例として—」教科書、資料集、資料2枚による授業2時間（前ページ掲載）

(4) グループ発表の1例

〈ソビエトの農牧業〉 HIC第8班5名資料三枚、教科書、資料集、地図帳使発表2時間

(発表要旨)

- ① ソビエト連邦という国…遅れた国から進んだ国へ
- ② 主要農作物の分布…自然条件と関連させて
- ③ 農事経営…コルホーズ・ソホーズを中心として
- ④ 農牧…統計と世界的地位

(質問・討論の内容)

授業の記録ノート一部抜粋と教官の記録から

- 質問、革命後、農奴が解放されて、農民はほとんど自作農にかわったというが、それがなぜ集団化されていかねばならなかったのか。
- 答 それは最初に配布した資料にはありませんでしたが、問題になると思い農業の歴史を調べてみました。
- 答えはこのプリントを読んで下さればわかると思います。

〈ソビエト農業の歴史〉

1861年……農奴解放が行なわれたが土地は、地主のもので、自作農になるためには多額の金をはらわねばならなかった。オプシチナ・バルシチナ等もはい止されなかった。

1906年……ストルイピン改革オプシチナのはい止分与地売買を認めた無土地プロレタリア

1917年……革命、地主の土地の没収・国内全土の国有化。内戦や外国のかんしょうにより農業生産は大巾に低下したといわれている。

この内戦のため国民の生活が苦しくなったので、政府は穀物売買の国家独占と農民に対する余剰食料の割当徴発を行なった、しかしこれは農民の不

満をかき、ますます生産が低下した。平和になるとこれがますますひどくなり各地でぼう動がおこった。

1920年……現物税の制度が採用され、余剰穀物の自由販売が復活

25年ごろ国民経済ほぼ回復しかし農業はたちおくれていた。それは革命のために農業経営が細分化し穀物生産特に商品化穀物の産出高をへらしていたからだ。これにより、農業の集団化が始まった。

1930年からの五カ年計画ではげしく強行された1927年に2500万ほどあった経営体が30年ごろには25万になった。

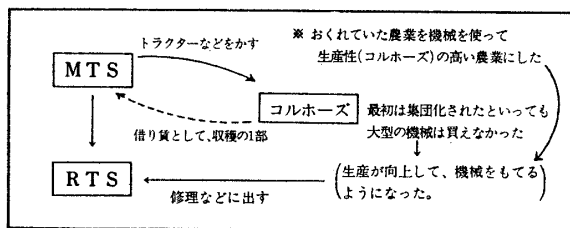
1938年以後小コルホーズの統合→大規模化。

1957年以後コルホーズのソホーズへの転かん。

コルホーズはさらに減少

(注) オプシチナ…土地の共同体・村港共同体 (ミール) バルシチナ…賦役労働

- 質問MTSがソ連の農牧業に大きな役割を果たしたといわれたが、そのあたりが良くわかったし、RTSに変わったというあたりともう一度説明して下さい。
- 答 それは次のように考えて下さい。



- 質問ソ連の農業生産は世界的地位を占めているが畜産部門は遅れていると説明があったが、それはなぜですか。
- 答 それは次のような理由からいえると思います。
 - ① 第2次大戦で家畜数が激減したこと。
 - ② コルホーズに集団化されたといっても、個人的副業が認められており、特にそれは野菜・家畜に重点がおかれているから高い生産につながらない。それは資料集の統計からも裏づけられると思います。

農業経営の相対的比重 (1960年)

	全利用 農地	播 種 面 積					家 畜			
		全作物	穀物	工作 芸物	じゃがい も、瓜、 野菜	飼料 作物	牛	乳牛	豚	羊
総面積	百万ha 503.1	百万ha 203.0	百万ha 121.7	百万ha 13.1	百万ha 11.2	百万ha 57.0	万頭 7,578.0	万頭 3,482.9	万頭 5,867.4	万頭 13,301.4
コルホーズ	61.7%	60.6%	60.4%	82.5%	38.0%	60.5%	47.8%	36.9%	46.6%	53.6%
コルホーズ員の個人的副業	1.2%	2.2%	0.8%	0.6%	27.1%	0.6%	19.8%	29.8%	17.5%	14.6%
ソホーズ	33.7%	33.1%	36.2%	15.5%	14.1%	34.4%	19.1%	14.6%	21.6%	23.6%
その他①	3.4%	4.1%	2.6%	1.4%	20.8%	4.5%	13.3%	18.7%	14.3%	8.2%

① 労働者ならびに事務員の個人的副業経営、ソホーズ以外の国営農企業

統計集「ソ連の農業」

(感想) 授業の記録より一部抜粋

① 大まかではあるがソ連の農業生産の実態がつかめたような気がした。ソ連は本当に広い国だ、ソ連のという国の大きさ(地理的にも経済的にも)を改めて考えさせられた。

② ソ連の農業を理解するには、ソ連の歴史や社会主義、共産主義というものをもっと深く知る必要があると思う。

③ 集団化とか集団制の農業というものの実情が理解できたような気がするが、トコトンまで理解するためには、発表時間と同じくらいの討論の時間が欲しい。

(5) グループ学習への生徒・教官の反応

① 生徒のグループ学習への反応

生徒のこのグループ学習への賛否の数は、それが何%という数値の持つ意味よりも、生徒個人の学習への姿勢の方がむしろ重要だと考えて、求めている。生の声を2, 3あげてみると

●私は反対である。確かに自分達の担当した所は良くわかるが、他班の発表はよほど自分が興味をもって取り組めかぎり頭に入らない。

●教科書的なことのみ学ぶのは一番つまらない。それこそ丸暗記の勉強になってしまう。グループ学習は自分達で自主的にやれば色々とおもしろい事が学べると期待したが、資料の不足、時間の不足、またやり方もわからないなど問題が出てきた。

●自分達で調べたことを発表し相手の理解を得る。これほど自分に対して自信と批判を知るものはないと思う。教官の授業にくらべると、張感がないが続けた方がよい。

② 教官の留意と反省

グループ学習のねらいは、教材(系統地理として、羅列的に並べられているものであっても)をいかに発展させながら学習を深めてくれるか、いかに興味をもって学習してくれるかということであった。従ってグループ学習の提案に際して陥りやすい問題点には注意を与えたが、生徒は様々な反応を示した。中にはかなり発展的な発表をしたグループもあれば、テーマからは的はずれな文章を読み上げるだけのグループもあ

った。ねらいはともかくとしても現実において問題点としてあげなければならないのは、教官自からの授業よりも時間と労力のかかる学習形態であることだ。

(何をどう学習するか、何をどう資料化するか、資料の印刷という事前の指導、発表時には期待どうりの進展をみせない時は、方向づけのための適当な質問など)その結果、生徒は教官の授業の方がわかりよいなどと最初の自主的な学習云々という事は忘れられてしまう。

さらに細い点については、生徒の発表内容が参考書的なものになってしまうということがあげられる。これは図書館の文献の少なさと、高校一年段階での地理の資料となり得る文献も少ないとかもかもしれない。しかし、種々の問題を抱えながらも新しい授業の形態や高校地理の領域はどこまでか、さらに教材たり得る地理的現象としては何を取上げるか、地理のねらいはなどを検討するためにも、このグループ学習を続けたい。

4. 領域構造の検討の今後の方向

—まとめにかえて— 地理の領域構造とは何にか、それは中等教育の中での社会科の位置づけをふまえた上で、社会科の中で、地理は何を、どう教えるか。生徒は地理から何を学びとるか、また地理的な物の見方考え方の養成といわれるものが、生徒にはどう蓄積されていくのか、などきわめて基礎的で重大な視点からの、地理科の分析ということだと考える。従って、領域構造の検討などと大テーマに結論など出るほどの実践や分析は試みられてはいない。唯、問題意識は明確にし、実践や分析が行なわれて行かねばならない。これまで述べてきたのは、今年度施したわずかの事例でしかない。今後こうした事例を積みあげて分析できる資料を作成したい。その方向としては、中学校の地理分野では、野外学習の実践、新しい地域区分による地誌学習(一つの方向としては社会科の総説にあげた地域区分に従って試みる)を、高校地理では、系統地理と地誌をかみあわせた新しい地理としての学習体系を、という観点に立って実験を試みてみたい。